

# 体育的学力を高める体育実践を求めて

学体連副会長 高橋健夫（日本体育大学 大学院研究科長）

## 【体育的学力ということ】

「体育的学力」という言葉があちこちで用いられるようになったが、この言葉をはじめに用いたのは私であった。私がこの言葉を用いたのは、当然ながら明確な意図があった。

教育分野で「学力」が問題になると、体育では「学力」ではなく、決まって「体力」が問題にされてきた。なぜ、体育では学力でなく体力なのか。その根本的な理由は、戦前の体育＝体力づくりという考え方が今でも政治家の間で、教育学者の間で、そして一般の人たちの間で根強く残っていて、体育分野でもそのことを受容する立場があるからである。私はそのような古い考え方を払拭すべきだと考えてきた。確かに体力を育成することは体育の重要な目標の1つだが、体育の授業で習得させようとしていることはそれだけではない。そのことを強調するために、「体育的学力」という言葉を用いたのである。

## メールマガジン続き

今回の学習指導要領の改訂に先立って中央教育審議会の体育専門部会において、ある行政官（キャリアー）から「体育では子どもたちに一体何を習得させようとしているのか。すべての子どもに保障できる指導内容（ミニマム）は何か。」と詰問された。この厳しい問いかけを受けて、専門部会では「体育の指導内容の明確化とその確かな習得」に向けて議論が続けられた。その結果、体育科の指導目標・内容は、図1のような構造で捉えられた。体育科は「身体能力（体力＋技能）」、「態度（社会的な態度）」、「知識、思考・判断」を具体的な目標とし、これらの目標の総和として生涯スポーツの継続的实践につながる価値的な態度や実践力を育成していくことが確認された。学習（指導）内容の視点からいえば、身体能力は「運動技術・戦術や体力づくりの方法の学習」であり、態度は「運動の社会的行動の学習」であり、知識、思考・判断は「運動技術や社会的行動に関わった知識や学び方の学習」ということになる。このことからわかるように、体育で身に付けさせたい能力は、体力に一元化することはできない。これらの学習内容を総合的に習得した能力や態度を「体育的学力」あるいは「体育の学力」と表現したのである。

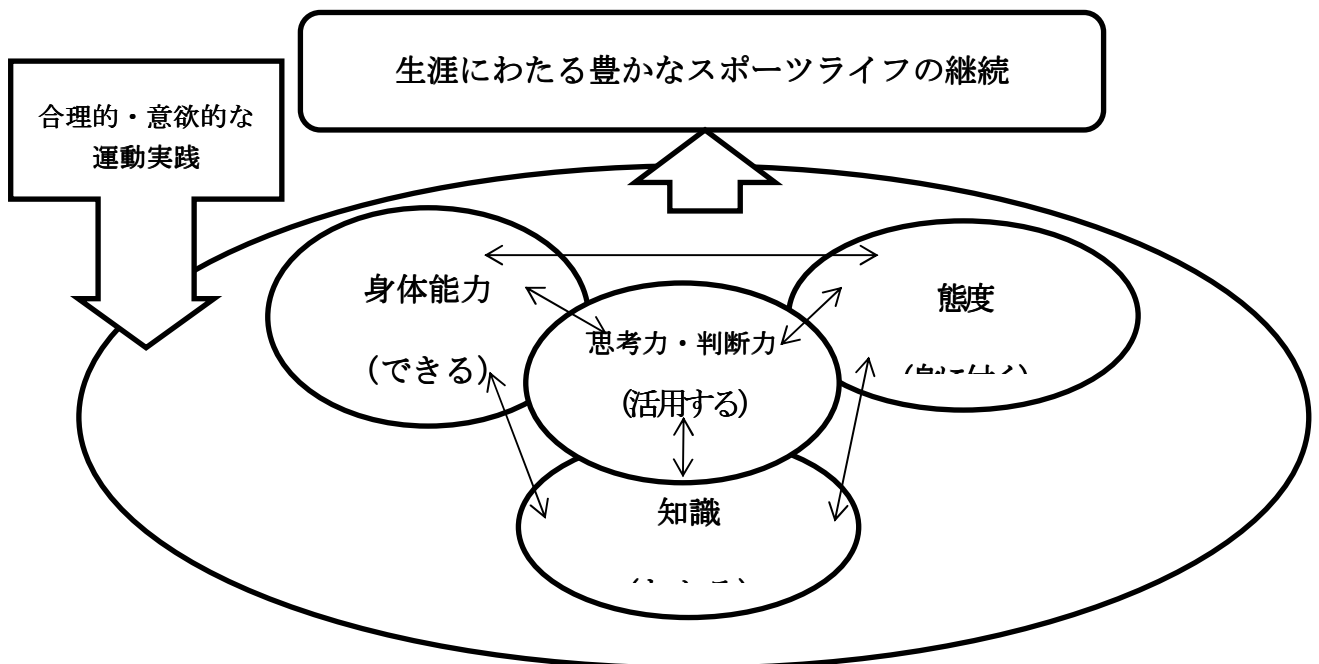


図1 体育の目標構造（中教審）1）

## 【体育的学力の実情】

このような「体育的学力」が体育授業を通して十分育成されているだろうか。現実的には、学習指導要領で示された指導内容が授業においてしっかり指導され、確実に習得させているだろうか。一概にはいえないとしても、多くの教師がそのような考え方のもとに指導していないのが実情であって、大きな学習成果があがっているとは到底思えない。私たちが行った「器械運動に関する調査結果（24 小学校の中学年・高学年生 1884 名と、8 中学校の 1928 中学生を対象）」を例にあげて考えてみよう。

特に小学校の学習指導要領（解説）の高学年段階で例示された各種目の技の達成率に注目すると、マット運動では、前転、後転、開脚前転などのやさしい「基本技」についてはおおむねスタンダードとなる 70% の平均達成率をクリアーしていた。しかし、同じ「基本技」でも倒立、倒立ブリッジ、側方倒立回転などの倒立系の技については 70% を大きく下回った。同様に、「発展技」の倒立前転、跳び前転、伸膝後転、ロンダートなど技の達成率は低く、50% を大きく下回った。

跳び箱運動について見ると、開脚とびや台上前転などの「基本技」については、スタンダードとなる 70% の平均達成率をクリアーしていた。しかし、「基本技」の抱え込み跳びについては横向きの跳び箱で 60% で、縦向きでは 47% であった。また、「発展技」については、大きな台上前転は 45% で、首はね跳びや頭はね跳びはともに 20% 程度で、きわめて低調であった。

特に問題なのが鉄棒運動であった。表 1、2 に見るように、小学校高学年で 70% をかろうじてクリアーした技は、転向前下りと逆上がり（ともに 70% 程度）の 2 つのみで、後はすべて 50% を大きく下回った。総じて鉄棒運動にまっとうに取り組んでいる学校がきわめて少ない実態が明らかであった。

また、器械運動のすべての種目で、達成率の学校間格差が顕著で、熱心に取り組んでいる回答した学校の達成率は比較的高かったが、一般的な学校での達成率は、「基本技」ですら極めて低かった。なお、今回調査対象となった小学校には多くの体育指定校が含まれていたため、通常の学校の達成率は一段と低くなるのが予想できる。いずれにせよ、学習指導要領に示された学習内容の達成率は高いとはいえないが、学校や教師の取り組みによって大きな差があるということである。

次に、小学校と中学校の達成率を比較してみると、表 1、2 から明らかなように、中学生の達成率は、多くの技で小学生よりも低く、中学では器械運動の授業がほとんど実施されていないのではないかとと思われるほどの惨状であった。改めて、中学校での器械運動の教材価値やその位置づけについて再検討することが求められる。果たして、器械運動は中学校では不必要な教材であろうか。

このような指導内容に関わった達成率の低さは、他の領域でも同様ではないかと推察される。とりわけ、中学・高校では「体育理論」が位置付き、教科書も配布されているが、体育理論がほとんど指導されていないのではないかと疑われる。毎年、体育大学に入学してくる学生に「高校で体育理論を教わったか」と問いかけることにしているが、わずかな学生を除いて答えは「ノー」である。これまで「体育理論は体育の実技指導に関連して指導してもよい」という暗黙の了解ができあがり、体育教師自身が体育理論に無関心になってしまっていると思われる。これでは、体育の授業時間を削減されても仕方がない。このような現状を憂慮して、今回の改定で、体育理論を教室で必ず指導する方針が出された。体育教師の意識変革と充実した指導が期待される。

## 【体育的学力の習得状況調査の実施】

文部科学省では、体育についても学力調査を行う方針を固め、「学習指導要領の実施状況調査」に向けて現在準備が進められている。24 年度中に、何をどのような方法で調査すべきか慎重に検討し、25 年度には小学校高学年の児童と中学生を対象に全国のいくつかの学校を抽出して「体育の学力調査」を実施する予定である。小学校については、おそらく学習指導要領の各運動領域の技能、態度、知識などの指導内容に関わってそれらの習得度が調査されるはずである。中学校では当然体育理論もその対象になるはずである。このような調査を実施することに賛否両論があると予想されるが、私は体育科がその存在意義を国民に理解させるうえで、また、教師の体育授業への取り組み姿勢を変革させるうえでも、大きな意義があると考えている。体育の授業で何が習得できるのか、このことを明確にし、その実現を図ってこそ、体育科の存在意義が国民に承認されることになると思う。

表1 鉄棒運動の基本技・発展技の達成率2)

学校 学年 技名	小学校								中学校			
	3・4年生				5・6年生				1・2年生			
	基本技○ 発展技●	経験		達成	基本技○ 発展技●	経験		達成	基本技○ 発展技●	経験		達成
	経験度	未経験度	達成度		経験度	未経験度	達成度		経験度	未経験度	達成度	
膝掛け振り上がり	○	84.9	15.1	47.6	○	84.5	15.5	50.8	○	62.6	37.4	36.6
膝掛け上がり	●	52.8	47.2	24.2	○	65.6	34.4	32.8	○	43.4	36.6	21.8
補助逆上がり	○	96.3	3.7	87.4		-	-	-		-	-	-
逆上がり	●	97.4	2.6	68.7	○	98.3	1.7	73.6	○	87.4	12.6	64.0
もも掛け上がり		-	-	-		-	-	-	●	37.0	63.0	16.5
懸垂振動		-	-	-		-	-	-	●	23.7	76.3	30.6
け上がり		-	-	-		-	-	-	●	45.8	54.2	20.9
抱え込み回り	○	64.1	35.9	27.9	○	65.1	34.9	23.7	○	62.2	37.8	44.4
前方支持回転	●	81.9	18.1	50.1	○	73.0	27.0	54.8	○	75.9	34.1	59.0
前方伸膝支持回転		-	-	-		-	-	-	●	55.3	44.7	33.5
後方支持回転	●	72.6	27.4	30.0	○	76.1	23.9	28.8	○	37.0	63.0	23.3
後方片膝掛け回転	●	70.0	30.0	27.0	○	63.8	36.2	20.5		-	-	-
後方膝掛け回転		-	-	-		-	-	-	●	51.2	48.8	14.9
後方もも掛け回転		-	-	-		-	-	-	●	36.5	63.5	6.5
後方伸膝支持回転		-	-	-		-	-	-	●	37.0	63.0	23.3
後方浮支持回転		-	-	-		-	-	-	●	39.7	60.3	5.3
前方片膝掛け回転	○	74.9	25.1	34.9	○	57.7	42.3	29.0		-	-	-
前方膝掛け回転		-	-	-		-	-	-	●	56.6	43.4	32.9
前方もも掛け回転		-	-	-		-	-	-	●	39.7	60.3	18.2
前回り下り	○	95.3	4.7	90.1		-	-	-		-	-	-
転向前下り	○	77.4	22.6	68.4	○	81.3	18.7	74.6	○	68.8	31.2	60.3
片足踏み越し下り		-	-	-	○	72.9	27.1	64.8	●	58.8	41.2	50.2
支持跳び越し下り		-	-	-		-	-	-	●	24.5	75.4	9.1
両膝掛け倒立下り	●	80.1	29.9	66.8		-	-	-		-	-	-
両膝掛け振動下り	○	57.5	42.5	29.2	○	61.7	38.3	30.8		-	-	-
棒下振り出し下り		-	-	-		-	-	-	●	87.4	12.6	18.3
前振り跳び下り		-	-	-		-	-	-	●	33.3	66.7	30.8

表2 鉄棒運動 70%達成度をクリアーしている技

小学校3・4年生	小学校5・6年生	中学校
補助逆上がり 前回り下り	逆上がり 転向前下り	該当なし

## 【成果中心の指導に向かう世界の体育】

「楽しい体育」のスローガンのもとで、「学習成果ではなく学習過程で楽しさを体験すること」が大切だと唱えられてきた。しかし、このような主張にはまやかしがあると考え。そこで本当に訴えたかったことは、「従来の技能や知識といった陶冶課題に関わった学習成果のみを追い求めるのではなく、学習過程における思考・判断や楽しさ経験を大切にして、課題解決力（学び方）の成果や情意的な成果（関心・意欲・態度）をより重視すべきだ」ということではなかったのか。いずれにせよ、このような「過程中心主義」の結果、学習方法の形式（めあて1，めあて2；ねらい1，ねらい2）のみが大切にされるようになり、技能や知識の学習成果をないがしろにする実践が横行するようになった。このことは大きな間違いであったと考える。

これまでの「楽しい体育」の理念自体を否定するわけではないが、学校のアカウントビリティが問われ、体育科の学習内容を明確にして学習内容の習得をめざそうとするなら、体育科の中心的な内容として身体的能力や社会的な態度、知識の学習成果の確実な習得がめざされるべきである。

このような学習成果を尊重する方針はひとりわが国だけでなく、国際的にも共通している。特にイギリスでは、近年「Intended Learning Outcome's」という用語が頻繁に用いられるようになっている。この言葉の意味することは、まず、どのような学習成果を求めるのかを明確にし、この実現すべき成果に照らして、学習目標や学習内容、学習方法を設計すべきだということである。同様に、アメリカでは体育のナショナルスタンダードが作成され、スタンダードとなる目標や内容、そしてこれらの実現度を評価する規範や基準が明示されるようになっている。

このような成果を重視する方針は体育の楽しさを重視する考え方と矛盾するものではない。実際、体育授業のオーセンティックな楽しさは、わかったり、関わったりするなかで、課題とすること（競争的課題、克服的課題、フォームの達成課題、記録の達成課題、表現的課題）ができるようになることによって経験できるわけで、楽しさや自発性を口先で唱えるだけでは実現できるものではない。しかし、技能的な成果のみを追い求め、訓練的な授業が行われれば、楽しさは経験できないし、子どもに評価される授業が実現されるわけがない。「わかる、かかわる、できる」ことの緊密な関係を、子どもたちの主体的な学習の中で創出させることが求められる。

幸いなことに、新学習指導要領が発刊されて以降、成果を志向する体育授業があちこちで見られるようになった。筆者は大修館書店が発刊する雑誌「体育科教育」のグラビアのページを長年にわたって担当し、全国各地の小・中学校の多くの体育授業を観察・評価してきたが、その中で大きな学習成果があり、子どもたちが高く評価した数々の授業を見出してきた。少々宣伝になるが、今回、雑誌のグラビアで取り上げた授業の中から、とりわけ注目すべき30のすぐれた体育授業（中学校と小学校高学年）を選定し、写真を中心にした著書にあわせて1本のDVDにまとめて出版することになった。ぜひ、すぐれた体育授業のリアル実像を映像によってご理解いただきたい。

### 引用文献

- 1)文部科学省（2008）健やかな体を育む教育のあり方に関する専門部会、体育分野ワーキンググループにおける審議権等について、p.13
- 2)高橋健夫（2010）体育科のナショナルスタンダード策定の試みとその妥当性の検証、科学研究費基盤研究A研究成果報告書、pp.199-243